

富山如大地

— 第139号 —

発行人 幽溪 浩 発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
 真宗大谷派富山教務所
 編集 富山教区如大地編集委員会 電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799
 教区・別院ホームページ <http://toyama.higashibetsuin.com/>
 教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



ぶっさん
晴雲幼稚園(富山市)での仏参の様子

もくじ
・ハンセンネットワークシンポジウム 中杉隆法 氏 ハンセン病問題Q&A 2~11
・社会教化小委員会宿泊研修 二階堂行壽 氏 12~20
・親鸞会報告 21
・研修会報告 22~25
・退任・着任ご挨拶 教区だより 26~28

『アーロン収容所』作家で歴史学者会田雄次氏が戦後間もなく松下政経塾の塾生を前に「日本の将来が危うい」と言い、その理由として「歴史教育」、「道徳教育」、そして「宗教教育」がなされていない事をあげている。

今私たちが身を置く浄土真宗の教化の場において、次代を担う若者たちへの教化が十分になされているのであろうか。

青少年年に求める姿は、優しさや思いやり、感謝の気持ちであり、昨今自分の事しか考えない人間が増えているのは、そうした背景もあるのではないか。

かつて先輩たちが日曜学校として地域の若者を育み、布教を行ってきた姿は今は少ない。

高度経済成長期に子ども達は寺から離れていった。自坊でも同様の事態が起きた時、先代は幼児期の宗教的情操教育を目指し、幼稚園を開設した。

「幼な子に 合わせて見せる この両手」

(宮下長太郎)

幼稚園の仏参では、園児と共に正信偈を唱和し、聖人が求められた報恩謝徳の心が根付いてくれることを念じている。

第十組 西元寺 神保覚央

＊＊＊＊＊ 報恩謝徳の心 ＊＊＊＊＊

【富山教区教化テーマ】

私は何を願って生きるのか？ — 親鸞からのメッセージ —

ハンセン病訴訟勝訴14周年 記念シンポジウム

奪われたふるさとへ帰るべき場所、悲しみをとおして

「ワクワク保養ツアーオー in 邑久光明園」 実行委員会事務局長
真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会委員 中 杉 隆 法 氏

一〇一五年九月三十日、「ハンセン病問題ふるさとネットワーク

富山」主催による記念シンポジウムが富山市民プラザを会場に開催されました。この取り組みは、東西両本願寺、民医連、諸団体が協力して開催し続けており、「このたび真宗大谷派山陽教区西林寺の中杉隆法氏による記念講演が「奪われたふるさとへ帰るべき場所、悲しみをとおして」と題してありました。本号ではその講演録を掲載します。

皆さんこんばんは。

神戸から來ました中杉隆法と申します。真宗大谷派の僧侶をしております。今日は先程ご紹介いただいたとおり、福島の子供達や親子にハンセン病療養所へ来ていただいて保養を行う活動のお話をさせていただきます。こういう大きなところで話を

ハンセン病問題との出会い

一九九六年にハンセン病隔離政策の根本的なものであった「らい予防法」という法律が廃止されましたが、翌年に初めて療養所に足を運びました。一九九五年に阪神淡路大震災が起こりまして、私は神戸市兵庫区にあるお寺をお預かりしておりますが、震災によってそのお寺と私の生まれ育った町が焼け野原になったという体験をしました。私はその年に京都の大学を卒業して、神戸のお寺に帰って僧侶としてこれから生きていいくのだと漠然と自分なりに考えていました。しかし、自分が考えていました事とは違う震災という現実に遭

したことがないので、うまく話せるか分かりませんがどうぞよろしくお願いします。最初に私が、このハンセン病問題に出会ったきっかけについて、自己紹介を兼ねてお話をさせていただきます。

い、自分はこれからどういうふうに生きていくべきなのかということを考えた。その頃、ある人に「ハンセン病療養所へ行きませんか?」とお説いて受けて行つたのが最初です。真宗大谷派という教団は、全国で三十のグループに分かれており、その一つひとつを「教区」と言うのですが、私が住んでいる神戸市は「山陽教区」と言います。療養所も岡山県にあり、同じ山陽教区ということですいぶん前から教区の人間が療養所に足を運んで定期的に交流会をしておりました。交流会に参加するかたちで初めて療養所に行きました。当時、ハンセン病問題はもちろんのこと、ハンセン病という言葉も聞いたことがありませんでした。最初に療養所と聞いた時は病院みたいなところで、そこにおられる患者さん達と交流したり、お茶を飲みながら話をするのだと想像しておりました。しかし、療養所へ行ってみると、当時は「らい予防法」が廃止されて一年ということで、その交流会の中でも「隔離」とか「らい予防法」という言葉が出てきたり、療養所の中にもお寺があ

り、お寺の前には納骨堂があるとうようなところで「これは一体どういう所なのだろうか。大変なところへ来てしまった」というような思いでした。そして、交流会がひと通り終わって「やれやれ、これで終わった」と思い神戸へ帰ろうとした時に、そのお寺の会長さんから「お前は初めて来たのか。だったら病棟へ連れて行ってやろう」と言われました。

療養所の中にはたくさんの施設がありますが、病棟というのは治療したり、具合の悪い方が入院することです。「ハンセン病療養所」と言いますが、現在はハンセン病を治療されている方は「人もおられません。ですから、「ハンセン病療養所」というのは、正式な名称ではなく「国立療養所」が正式名称です。ただ、かつての隔離の中で、ハンセン病に感染もしくは発病して入所させられた方々は、その療養所の中での大変厳しい強制労働などで非常に重い障害を負わされました。その後遺症で今も療養所にたくさんの方がおられるということで、その病棟に行きました。今からだいたい十八年前のことですが、その当時は今よりもた

くさんの入所者がおられました。また、非常に重い後遺症が残つておられる方も多くいました。腕の無い方、足を失われた方、眼球を失われた方が病棟にたくさんおられたのです。正直に言いますと、とても怖かったのです。初めてという事もありますが、そこに居るのが怖くなりました。ある一人の患者さんが、ベッドの上から私の方をずっと睨み付けるのです。当時、私は二十四歳位だったと思うのですが、そんな若い者がその療養所の病棟に行くことは、多分ほとんどなかつたので珍しいという事もあり、「お前は一体ここに何をしに来たのだ」というような視線を私の方へ投げかけ続けてくるのです。とても怖くて早く帰りたいと思ったのですが、その時にその方の視線に、あらゆる意味でメッセージみたいなものをいただいたという事を今でも思っています。それは「私はこの療養所でこのような現実を生きてきました。隔離という現実を生きてきました。その隔離ということを知ったあなたは、その姿を見たあなたはこれからどうやって生きていくのですか?」

く感じました。その方がどのよう何を思って私の方をずっと睨みつけておられたのかを確認することは残念ながら出来なかつたのですが「お前は一体これからどのように生きるのだ」というような問いかけが今も療養所に足を運び続ける一つの大きな根拠になっています。気が付くと十八年位経つていたのですが、現在は真宗大谷派の中にある「ハンセン病問題に関する懇談会」の委員をしております。ですから、頻繁に療養所へ足を運び、療養所の人達や入所者の方々と出会うことは何よりも大切にしながら色々な活動をさせていただいております。

奪われたふるさと

色々な活動があるのですが、その中の一つにこれまでなかつた新しい動きとして始まったのが「ワクワク保養ツアーア in 邑久光明園」という、ハンセン病療養所で福島の親子に保養してもらうプロジェクトです。二〇一一年三月十一日に東日本大震災が起きました。阪神淡路大震災の

被災者でもあつた私は、その時「一体自分は何をしたら良いのか。何が出来るのだろうか」と思つて、とりあえず今出来ることをやろうと救援物資を集めて被災地に送つたり、あるいは仲間と街頭に立つて募金活動や義援金を集めてそれを被災地に送つたりしていました。その間もずっと療養所へは行き続けていたのですが、東日本大震災の事や福島の事を療養所の人達と話す中で色々な声や姿が見えてきました。そして、福島第一原発の事故によって住む家を奪われ、家族がバラバラになつて苦しんでおられる方々がおられるという状況が次々と分かつてきました。震災から約一年後の二月に京都でちょっとした規模の集会を開いたのですが、その時に福島からお母さん達をお呼びして「今福島で生きることの思いや状況について、そして外に向かって言いたいこと」を聞く機会がありました。「私達は子供達を守りたいのです。福島は限界です。どうか福島のことを忘れないでください」とお母さん達は涙ながらに叫び続けてくれました。放射能という目に見えない恐怖の中で必死に子供達の命を守

ろうとするお母さん達の声を聞くことが出来ました。国の政策によって進められた原発、そしてその事故によって日常の生活を奪われてきました。しかし、の中でも子供達を守るために必死に立ち上がり、お母さん達の姿がありました。それは同じく国の隔離政策によって日常生活やそれまでの暮らしや家族、そして「ふるさと」を奪われてきたのです。その奪われた人間としての尊厳を取り戻すために立ち上がり、生きようとするハンセン病回復者の方々の姿と、そのお母さん達の姿が私は重なって見えたのです。「何をしようか」という時に一つのメッセージが思い出されました。皆さんのお手元に資料をお配りしておりますが、これはハンセン病療養所入所者の最も大きな組織である「全国ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）」の会長をされていた神美知宏さんのメッセージなのです。東日本大震災が起きた二〇一一年に、私達の宗門では宗祖である親鸞聖人の七百五十回忌という、五十年に一度の大きな法要が勤まる予定でした。第一期、第二期、第三期に分けて、三月十九

日から第一期の法要が勤まる予定でしたが、その前の三月十一日に東日本大震災が起こったということで、急遽予定を変更して第一期の法要を「東日本大震災被災者支援のつどい」に変更しました。その「被災者支援のつどい」に色々な方々からメッセージをいただいたのです。そのうちの一つが、この神さんからいただいたメッセージでした。少し読んでみたいと思います。

ハンセン病患者の強制隔離絶滅政策の被害者であり、帰るべき場所のない私たちではあっても、被災者への思いと共に、どのような支援ができるかを現在検討し実行に移しております。平均年齢八十歳

(神美知宏さん 前全療協会長)

をこえる身であるゆえ、大きなことは申せませんが、これまでハンセン病問題に対してご理解をいただいてきた皆さまと共に、この苦難にぶつかっていきたいと決意しております。現在、すでに全国の療養所に呼びかけて取り組んでいることとして、被災者に送る義援金を募っております。さらに、被災者の救護所として療養所の一部

を開放できないかと検討しています。この措置には、國の方針として厚生労働省も動いており、私もその実現をこころより願っています。ハンセン病療養所が、被災者のために用いられるることは、被災者の方々が来たということが聞いて、その提案をしても療養所に被災者の方々が来ることはなかためています。二〇〇九年四月に施行された「ハンセン病問題基本法」は地域への療養所の開放を目指しており、ハンセン病問題の解決にも資することだと考えております。

ワクワク保養ツアーア

津波で家を失った方々に対しても、療養所の一部を開放してそこを提供し、一時でもいいから住んでいただくという提案です。現在どこの療養所でも居住棟が空き部屋になってきているのです。それは入所者の方が亡くなられて空き部屋になるということとありますし、高齢化に伴ってその居住棟から介護者の方が常駐するセンターへ引っ越しをされることもある

ります。そうすると空き部屋がたくさん出来る訳です。そこへ被災者の方々に来ていただいてはどうかとう、非常に大切な提案でしたが、療養所に被災者の方々が来たといふことは聞いていません。震災から1年経って、その提案をしても療養所に被災者の方々が来ることはなかたのです。ハンセン病療養所というところは、そもそも隔離の場所なので、島や山の上とかいわゆる辺鄙などところに建てられているのです。ですから、実際に被災者の方々が療養所に来て、生活が出来るかというと、それはそれでなかなか大変なことだらうと思います。それともう一つは、やはりいまだに根強いハンセン病というものが大きな壁となつてハンセン病療養所に避難するということがなかつたのではないかと考えてきました。そこで、せっかく全療協が、このような提案をしていただいたことをこのまま何もしないでおくという訳にはいかないだろうということで、その提案を具体的に活用することは出来ないかと考えました。それならば、福島の子供達やお母さん方に少しの

間だけでも療養所に来ていただきいて、私達がお世話をしながら放射能の不安をほんの少しの間だけでも取り除いて安心して過ごしていただくという企画を立てました。それが「ワクワク保養ツアーハンセン病」です。保養活動というものは色んな所で行われていますが、目的は色々あると思います。まず、子供達を放射線量の高い所から低い所へ移動し放射能に汚染されない所へ子供達を連れて来ることによって、内部被曝を軽減するという目的があると思います。ただし、私は放射能の専門家ではないので分からないのですが、一週間から十日程度の保養で果たして子供達の健康上にその様な効果が表れるかどうかということは分かりません。でも、放射能の事を気にせずにおもいっきり外で遊ぶことが出来ない状況にある子供達を外でおもいっきり遊ばせてあげるということだけでもできればいいと思つていました。そのことを直感的に感じたのは、二〇一二年の七月の終わりに第一回目の保養を行ったのですが、新幹線を降りて改札を出てきた時の子供達の姿を見た時に、これは大変なことだと思いました。

した。それは夏休み真っ盛りなのに子供達は全く日焼けもせずに青白い顔をしていたのです。それは決して太陽に当たっていなかったから青白いのではなく、虚ろな表情で「どこに連れられて来られたのだ」とキヨロキヨロと不安そうにしていました。その姿を見た時に「これはやらなければいけない」と直感的に思いました。それがこの「ワクワク保養ツアーハンセン病」の始まりです。そして、第一回目のツアーハンセン病治療所ではなくして「ハンセン病療養所」ではなくて「国立療養所邑久光明園」というのが正式な名称です。なぜハンセン病の患者でもないのに療養所におられるのかというと、かつて病の身でありながら入所させられ、強制労働を課せられました。それは非常に厳しいものであつたようで、後遺症によつて指を失つたり視力を失つたりした方がおられました。また、未だにハンセン病に対する差別偏見が根強く社会に残つており、病気が治つても隔離というものの根拠であつた「らい予防法」が廃止されても、約百五十名の方が故郷へ帰れずに今も療養所で生活されています。

この長島には「邑久光明園」と「長島愛生園」の二つの療養所があります。最初に長島愛生園があつたのですが、光明園はもともと大阪にあり「外島保養院」という名前で非

養活動の場所でもあります邑久光明園の事をお話しますと、光明園は岡山県の瀬戸内市にあります。瀬戸内海に浮かぶ長島という小さな島にある国立の療養所です。先ほども言つたように、現在ハンセン病の病気を治療されている方はいませんので「ハンセン病療養所」ではなくて「国立療養所邑久光明園」というのが正式な名称です。なぜハンセン病の患者でもないのに療養所におられるのかというと、かつて病の身でありながら入所させられ、強制労働を課せられました。それは非常に厳しいものであつたようで、後遺症によつて指を失つたり視力を失つたりした方がおられました。また、未だにハンセン病に対する差別偏見が根強く社会に残つており、病気が治つても隔離というものの根拠であつた「らい予防法」が廃止されても、約百五十名の方が故郷へ帰れずに今も療養所で生活されています。

园の事をお話しますと、光明園は岡山県の瀬戸内市にあります。瀬戸内海に浮かぶ長島という小さな島にある国立の療養所です。先ほども言つたように、現在ハンセン病の病気を治療されている方はいませんので「ハンセン病療養所」ではなくて「国立療養所邑久光明園」というのが正式な名称です。なぜハンセン病の患者でもないのに療養所におられるのかというと、かつて病の身でありながら入所させられ、強制労働を課せられました。それは非常に厳しいものであつたようで、後遺症によつて指を失つたり視力を失つたりした方がおられました。また、未だにハンセン病に対する差別偏見が根強く社会に残つており、病気が治つても隔離というものの根拠であつた「らい予防法」が廃止されても、約百五十名の方が故郷へ帰れずに今も療養所で生活されています。

园の事をお話しますと、光明園は岡山県の瀬戸内市にあります。瀬戸内海に浮かぶ長島という小さな島にある国立の療養所です。先ほども言つたように、現在ハンセン病の病気を治療されている方はいませんので「ハンセン病療養所」ではなくて「国立療養所邑久光明園」というのが正式な名称です。なぜハンセン病の患者でもないのに療養所におられるのかというと、かつて病の身でありながら入所させられ、強制労働を課せられました。それは非常に厳しいものであつたようで、後遺症によつて指を失つたり視力を失つたりした方がおられました。また、未だにハンセン病に対する差別偏見が根強く社会に残つており、病気が治つても隔離というものの根拠であつた「らい予防法」が廃止されても、約百五十名の方が故郷へ帰れずに今も療養所で生活されています。

园の事をお話しますと、光明園は岡山県の瀬戸内市にあります。瀬戸内海に浮かぶ長島という小さな島にある国立の療養所です。先ほども言つたように、現在ハンセン病の病気を治療されている方はいませんので「ハンセン病療養所」ではなくて「国立療養所邑久光明園」というのが正式な名称です。なぜハンセン病の患者でもないのに療養所におられるのかというと、かつて病の身でありながら入所させられ、強制労働を課せられました。それは非常に厳しいものであつたようで、後遺症によつて指を失つたり視力を失つたりした方がおられました。また、未だにハンセン病に対する差別偏見が根強く社会に残つており、病気が治つても隔離というものの根拠であつた「らい予防法」が廃止されても、約百五十名の方が故郷へ帰れずに今も療養所で生活されています。

ましたが、この交流を積み重ねてきた上に今回の保養ツア－が実現したということです。

三つの不安

今回、私を富山に呼んでいただき
ましたが、このような形で報告をす
るということは初めてです。改めて

りました。まず、私が最初に申したことがきっかけとなり、この度の保養活動をするのだと決断し、準備を進めていく中で三つの大きな不安がありました。

で福島の子供達の保養活動を行うと
決めて準備する中で、「本当に光明
園に子供達は来てくれるのだろうか?」
という不安でした。私たち自身は、
これまでハンセン病問題に関わって
いく中で「隔離」あるいは「解放」
ということを、たくさんの人たちと
出会い、聞いて学んできたのですが、
その反面、未だに根強く残っている
差別偏見の現実を見てきました。そ

ういう中で「本当にハンセン病療養所に福島の子供達は来てくれるのだろうか?」ということを思いました。「保養に来ませんか?」というホームページがあり、そのホームページに募集の掲載をさせていただくのですが、それを見た人が募集の申し込みをしてくるのですけども色々な団体が様々な保養・活動を行っています。

例えば、リゾート地で高原のコテージを提供して保養していただくという団体もありました。大阪の方で

所には子供たちなんて来ないのだ。
まだまだ隔離、差別は続いているのだ」と思わせてします。そういうことになるのではないかということを思い
安がありました。それだけは絶対にあつてはならないということを
まして、私自身を含めスタッフそれ
ぞれにもう一度このハンセン病療養
所で福島の子供たちの保養を行うと
いう事の意味を確認しました。そして、先程申しました保養を募集して
いるホームページに次の文章を載せ
ました。

(ワクワク保養ツアーヒロセ久光明園
開催趣旨より一部抜粋)

ハンセン病療養所はこれまで隔離の象徴として位置づけられてきました。しかしこれからは差別からの解放、いのちを守る象徴として療養所を位置づけていきたいと考えています。その意味でも福島の人たちを被曝から守る場所がハンセン病療養である必要性は高いと考えています。

私たちが活動を行ふに当たつて由
心となる願いというものをホームペ
ージに載せて募集を行いました。す
るとどうなつたかと言いますと、こ
のことが功を奏したのかは分かりま
せんが、募集を載せた次の日から參
加希望の電話や問い合わせの電話が
私の携帯にジャンジャンかかってき
ました。結果的にはあつという間に
定員となりました。しかも、先程の
ビデオに映つておられたSさん一家
は「ハンセン病療養所だから保養に

事が出てくるのです。

思っていた一つ目の不安は無くなつた訳ですが、またその中から色々な

来ます」と言つてくださった方達なのです。その意味では、私が最初に

次に二つ目の不安ですけれども、これは入所者の方々との問題です。光明園の入所者の方々は自分たちが生活しているところに福島からたくさんの人たちが来て、しかも子供達がたくさんやって来るということに対して非常に戸惑いを感じておられました。もちろん、個人差があるのですがハンセン病療養所には結婚して夫婦になんしても、子供を身ごもり出産をして子育てをすることは許されていませんでした。「ハンセン病は遺伝病」という認識から、ハンセン病患者の子供もハンセン病患者とされしていました。それはこの国にとっては非常に都合の悪いことであり、一九四八年には「優生保護法」という法律が公布されて、その中にハンセン病の患者も組み込まれていきました。つまり、ハンセン病患者への断種・堕胎ということが行われていきます。療養所内での結婚を認める代わりに男性は断種、つまり精子の管

胎させるということが光明園の中で
うことが分かると強制的に中絶、墮
けないので。女性が妊娠したとい
けを切るという手術を受けなければい

ていると仰つておられました。しかし、その二人の赤ちゃんは〇さんに一度も抱かれることなくその時の担当の看護師によつてその命を殺めら
れたのです。

直接経験をされた方にお話を聞くことがありました。光明園で長らく生活をされておられる〇さんは療養所の中で恋愛し妊娠をされたのです。そして、赤ちゃんを授かって、〇さんは何とか授かった命を産んで子供を育てたいと思いました。これは当然の思い願いです。しかし、療養所の中で子供を産むことは許されないのです。〇さんは少しずつ大きくなっています。その胎児達を祀った慰靈碑が光明園の中になります。

このようなお話を直接お聞きすることができました。先程のビデオの中にもありましたが、実はこの光明園には生まれて一度もお母さんに抱かれることなくその命を殺められた胎児の標本、ホルマリン漬けが四十九体光明園の中に残されておりました。長い間、誰にも見つけられることがなくその場に放置されていたのです。その胎児達を祀った慰靈碑が

そりと療養所の中で生活をされたそうです。しかし、そのことを最後まで隠し通すことが出来ずに職員の人を見つかり、当然、療養所の中で出産をするということは出来ませんので、○さんは中絶の手術台へ乗せられました。八ヶ月ですから中絶ではありません。殺人です。双子だったそうです。○さんのお腹の中から引きずり出されたその二人の赤ちゃんが、産声を上げたそうです。○さんはその産声をはつきりと今も耳に残つた。きっと喜んでくれるだろうと思いました。何気ないつもりで長男を連れて行きました。普段はとても仲良くしてくれていたおばあちゃんにいきなり「こんな所に赤ん坊なんか連れて

くるな」と激しい口調で怒られました。とても仲良くしておられたおばあちゃんです。私が結婚するときも、とても喜んでくれてお祝いしてくれたおばあちゃんが子供、しかも赤ん坊という事になると色々な思いが込み上げてくるのかもしれません。そのおばあちゃんは亡くなられましたが今でもその言葉を思い出します。そういう自分自身の体験、経験もあって、それだけ入所の方々が色々な思いを抱きながら今も療養所で暮らしておられ、色々な歴史や色々な時間をおそれぞれが生きてきておられたのだということを改めて思います。そして、一年目の初めてのツアーブ番が近付くにつれて療養所の人たちが「中杉さん、福島の子供達に対して私達はどうしたらしいの?何をしてあげたらいいの?」と聞いてくるのです。僕もその時初めてだったのです。僕もその時初めてだったのと、しかも会ったこともない子供達が来る訳ですから「どうなるのだろう?」という言葉を聞く度にまた僕の不安が大きくなっていくのです。「僕たちがいるから大丈夫ですよ。何をしなければいけないということもないです。そこにいてくれるだけ

でいいのですよ」と言っていたのですが、やはり入所者の方々は光明園にそんなたくさんの子供達が来ることに対して色々な思いを持っておられたのです。いよいよ本番が始まって、最初に出会ったときは、さすがに子供達も緊張していました。「ここはどこなのだろう?」「どこに連れて来られたのだろう?」という事でキヨロキヨロ不安そうにしていました。ちゃんとやおばあちゃん達と言葉を交わしていくうち、すぐに懐に飛び込んでいくのです。子供達はすごいなあと思います。何がすごいかと申しますと、入居者の中には、先程申しました後遺症等で指を欠損されておられる方が多いのですが、その手を見て子供達は「おばあちゃん何で指がないの?」「おばあちゃん指導がうしたの?」「どこにやったの、痛くないの?」と聞くのです。入居者の方々も子供達が真正面から聞いてくれたので「ハンセン病という病気は神経を冒されて熱い物を熱いと感じないのだよ。それで火傷しても気づかないの。だから、指を切断しないといけなかつたのだよ」としつか

り答えることが出来たのです。逆に私たち大人はこんなことを聞いたたら失礼だという風に思います。バリアを張ってしまうとその人と出会えないのです。結局、そのことが壁になつて何も分からず仕舞いで終わつてしまつ事が多くあります。子供達は本当に水平に入所者の人たちと出会つてくれました。私のこの二つ目の不安は子供達自身が消し去つてくれました。そして不安に思つていた療養所の人たちも子供達と触れ合うのが嬉しくて仕方がない様子でした。療養所の方がスイカやメロンを持つて来たり、岡山ですからブドウを持つて差し入れに来るのです。差し入れに来るだけではなくて子供達の様子を覗いていくのです。おかげで楓会館の冷蔵庫は差し入れの果物やアイスクリームでいっぱいになりました。ですから、一年目は四台だった冷蔵庫が二年目には八台に増やしていました。それくらいに子供達は私たちの不安をよそにキチッと入居者の人たちと繋がつていつたのです。

次に三つ目の不安ですが、参加者の方々との問題です。ホームページに掲載した私たちの趣旨文を見て参り答えることが出来たのです。逆に私たち大人はこんなことを聞いたたら失礼だという風に思います。バリアを張ってしまうとその人と出会えないのです。結局、そのことが壁になつて何も分からず仕舞いで終わつてしまつ事が多くあります。子供達は本当に水平に入所者の人たちと出会つてくれました。私のこの二つ目の不安は子供達自身が消し去つてくれました。そして不安に思つていた療養所の人たちも子供達と触れ合うのが嬉しくて仕方がない様子でした。療養所の方がスイカやメロンを持つて来たり、岡山ですからブドウを持つて差し入れに来るのです。差し入れに来るだけではなくて子供達の様子を覗いていくのです。おかげで楓会館の冷蔵庫は差し入れの果物やアイスクリームでいっぱいになりました。ですから、一年目は四台だった冷蔵庫が二年目には八台に増やしていました。それくらいに子供達は私たちの不安をよそにキチッと入居者の人たちと繋がつていつたのです。

その事をはつきりさせておいてください」と厳しい口調で釘を刺されました。勝手に僕らが「療養所を会場とが出来るのだろうかという不安がありました。僕も頻繁に神戸から光明園には行つているのですが、ほとんどが日帰りです。朝行つて夕方に帰ってきます。時々、療養所に泊まらせていただくこともあります。でも、長い時でも一泊三日で、それ以上療養所に泊まつた経験はありません。瀬戸内海にある島ですから、海や山もあります。自然是たくさんあるのですが、歩いてコンビニやスーパーには行けません。また、七月の終わりから八月頃だと、梅雨明けが遅れて「雨ばかりだったらどうしよう」「大きな台風が来たらどうしよう」と思います。その中でも一番心配だったのは、ツアーミニ子供達が大きな怪我や病気をした時にどうするのかということでした。光明園は療養所ですので、お医者さんはおられるのですが小児科のお医者さんはいません。ですから、最初の打ち合わせの時に療養所の事務部長さんから「もし、このツアー中に子供達に重大な事故や怪我が起きてても光明園としては一切責任を取れません。びっくりしてワーッと泣いたのです。

その時僕はそこにはいませんでした。僕より若いスタッフの方が息子の様子を見て、光明園の事務室に連れて行ってくれたのです。その時に連絡があり「息子さんがこんなことになっているよ」ということで慌てて事務室に向かいました。事務室の横が病棟なのですが、息子は病棟へ移動していく、少し腫れているだけの指先を二人のお医者さんと五人の看護師さんが寄つたからって、指に包帯を巻いたり薬を塗つてくれたのです。それはどういうことかと言うと、打ち合わせの時には「一切責任は取れません。子供達の怪我や病気等、小児科ではないので治療することは出来ません」と言っていたのですが、実は光明園のお医者さんや看護師さんはツアーチ、子供達がいつ怪我をしてくるのか、どんな怪我や病気をしてくるのか、飛び込んでくるのかを待つていたのです。重病人のような指になつていました息子はとても嬉しかったのです。最初は、この活動を光明園ですることに当たつて「入所者の人たちに迷惑をかけてはいけない。職員の人たちにも迷惑をかけてはいけない。療養

所の中で保養はするけれども、皆さんの日頃の生活の邪魔になつてはいけない。そういう活動にしておかなければいけない」とどこかでは思つていたのですが、実はそうではなかつたのです。「ワクワク保養ツアーア」というのは、私たち実行委員スタッフだけがするものではなかつたのです。光明園の入所者の方々や園長先生をはじめとするお医者さんや職員の方々、光明園全体がこの「ワクワク保養ツアーア」を支えてくれていたのです。光明園が放射能から子供達を守るということなのです。これは実は大変なことです。何故ならば、光明園というのは国立の療養所です。言うまでもなく、国の施設です。しかし、この国は原発の事故以降も「放射能の影響はありません。子供達に健康的な被害はありません。だから福島から出なくても大丈夫です。福島はもう安全です、福島の海は、汚染水は完全にコントロールされております。再稼働に向かっていきます」というのが国の姿勢です。しかし、その国がしていることと、施設が言つていることは別のことをしている訳です。福島の子供達を放射

能から守る活動を光明園がしてくれたのです。ここでは光明園に迷惑がかかるのでなかなか言えないのです。が、今話したこと以外にも光明園は、国の姿勢に反して色々な事を私たちに協力してくれています。

ともに生きる

そして、お母さん達も非常に苦しめ悩みながら光明園へ保養に来てくださいました。保養に来ていただいたお母さん方全員が「岡山に保養に行く」と言って岡山には来られていません。学校の友達や近所の人たちに「ちょっと一週間岡山に保養に行つてきます」と言つて来た人は一人もいないのです。今福島でそれを言うと「まだそんなことを言つているの?」「そんなことを言つたら福島は危ないってレッテル貼られるんだよ」「ちょっと神経質じやない?」というバッシングを受けるのだそうです。そういう霧囲気の中で子供達を守ろうとするお母さん方には「本当にしんどい。もう限界です」という声があります。何がしんどいかと言うと、子供達をし

守ることに対する「しんどい」という言葉を福島では言えないのです。そのことを押さえ、我慢して子供達を守つていかなければならぬのです。そのことが何よりも「しんどい」と言われるのです。しかし、光明園に来ると、その本音を言えるのです。入所者の方たちはそのお母さんの目をまっすぐ見て、お母さん達の思いを真正面から聞いてくださいました。それはこのお母さん達の姿は、同じく国の政策によって、また世間の人たちによって人間として生きようとするその願いを奪われそうになつてているのです。このお母さんを私たちと同じような境遇にしようとしているのです。このお母さん達の姿を見て療養所の方々はお母さんと子供達を包み込むように守つてくれました。その姿を見て私はあらためて人と人とは悲しみという事を通して繋がつていくのだと思いました。人と人が繋がつていくことは、嬉しいことや楽しいことや喜ばしいこともあります。ただ嬉しいことや楽しいことで人が一つになつていく

という事ほど僕は怖いことはないと 思います。子供達を放射能から守るうと活動するお母さん達というのは、もしかすると、国から言うと都合の悪い人たちかもしません。しかし、ハンセン病隔離政策という事実、歴史を今まで聞き、学んできた私たちはその歩みの中で自分たちの都合で一つになる、自分たち以外のものをそこによって排除していくといふ人間のあり方、歴史が実際にこの国にはあったのだと学んできました。だからこそ楽しみや喜びで繋がるのではなく、悲しみを通して人と人が本当に出会っていく姿が実はツアーリのなかで見られたのです。それは私が始める前に想像していたことではなくて、想像していた以外の姿だったのですけれども、それが私の中では大きく響きました。先程紹介しました資料にありますが、次の言葉を紹介したいと思います。これは玉光順正さんという真宗大谷派の僧侶の方で私の大先輩でもあり、今もずっと大切なことを教えてくれている方です。玉光順正さんがずいぶん前に書かれた文章です。

私たちには見えないたくさんの人々がいる。私たちには見えないたくさんの人々がいる。それは見えない人々や見ようともしない人々をぬきにしたものである。それらはいつも見えない人々や見ようともしない人々をぬきにしたものです。他の団体では、少しでも多くの人々に保養していただこうということで、昨年とは違う方々に呼びかけて参加してもらうという所もあるのですが、私たちの所は療養所の入居者の人達との繋がりという事を考えて、同じ方々に声をかけて来ていただいているのです。来ていただきていると言いますけれど、実はもう二回目からはそうではないのです。子供達は福島の人たちは光明園に帰つてくるのです。光明園に「ただいま」と言って帰ってきます。それを入居者的人たちは「おかえり」と言つて迎えてくれるのです。光明園が子供達の帰る場所になるのです。入居者達の人達にとつても夏が近付いてくると「今年もあの子達が帰つてくるのか」と言います。そのような関係が出来ることは、最初の私の想像からはおよびませんでした。かつて、人間を隔離し、人と人との切り離しても、何らかの幸せを獲得しえたと思つても。

二〇一二年にこの様な「三つの大きな不安」というところから始まつたこのツアーリもこの前の夏で四回目を実施することが出来ました。私たちのツアーリは基本的にはずつと同じ参加者の方に参加していただいています。他の団体では、少しでも多くの人々に保養していただこうということで、昨年とは違う方々に呼びかけて参加してもらうという所もあるのですが、私たちの所は療養所の入居者の人達との繋がりという事を考えて、今回、このような報告の場をいただいて、色々な事がたくさんあるのですが、多くのことが見えてきました。最後に参加者のお母さんの感想文を紹介します。

子どもたちを安全な自然の中で遊ばせたい、海を体で感じてほしいと思ひ参加したワクワク保養ツア

をまさしく「ハンセン病」「原発」「放射能」ということから問われてゐるのだと思います。

達の帰る場所になるのです。入居者達の人達にとつても夏が近付いてくると「今年もあの子達が帰つてくるのか」と言います。そのような関係が

私たちには見えないたくさんの人々がいる。私たちには見ようともしないたくさんの人々がいる。

帰るべき場所、悲しみをとおして

私たちには見えないたくさんの人々がいる。私たちには見えないたくさんの人々がいる。それは見えない人々や見ようともしない人々をぬきにしたものです。他の団体では、少しでも多くの人々に保養していただこうということで、昨年とは違う方々に呼びかけて参加してもらうという所もあるのですが、私たちの所は療養所の入居者の人達との繋がりという事を考えて、今回、このような報告の場をいただいて、色々な事がたくさんあるのですが、多くのことが見えてきました。最後に参加者のお母さんの感想文を紹介します。

私たちには本当にどんな人とのよう生きていかたいのかということ

「子どもたちはお友達もでき、本当に楽しく、私に『そこは行つてはダメ!』と言われず、のびのびと過ごせたようです。真っ白な肌が真っ黒になっていくほど嬉しい気持ちになつきました。またハンセン病のことも理解するほど、親や子、本人の気持ちが伝わり涙が出ました。今の福島、今後の福島を見ているようです。自分たちの言いたいことを言い続けるのは本当にエネルギーのいることです。とても大変でくじけてしまいそうになります。とても勇気のいることです。頑張ってこられた方たちの強く暖かい心にふれて私も大きな気持ちでこの園でのツアーを過ごすことができました。これからも闘い続けなければいけない子どもたちです。どうか皆様の力を貸していただきこの保養を続けていただければとても力強いです。どうぞ忘れずによろしくお願ひいたします。ありがとうございます。ありがとうございました。
 (ワクワク保養ツアーパートナー Yさん)

光明園に帰つてきてる間、子供達は本当に元気です。スタッフがク

タクタになるくらいの元気さで光明園を縦横無尽に走り回ります。それぐらいに元気です。でも、光明園から福島へ帰った子供達は、その現実の中で苦しみもがきながら生きています。その報告をお母さんから手紙やメールでいただいております。特に最近気になっているのは、光明園から帰った子供達の元気のなさです。やめられないと、そのことをお母さん達がとても気にして「どうしよう」という相談を受けるのです。つまり、この「ワクワク保養ツアーア」については、光明園にいるだけの事ではないのだと思います。子供達が福島にいる間も光明園から福島のことを考えるのであります。子供達が福島にいる間も光明園から福島のことを考えるのです。子供達が福島にいる間、福島にいながら光明園のことを考えていくのです。そういう関係がある限り「ワクワク保養ツアーア」はずっと続していくと思います。もう少し言えば、終わりのない活動としてこれからもやっていきたいと思います。

(了)

正しい理解をめざして ハンセン病問題 Q&A

Q. ハンセン病とは?

A. ハンセン病は、体の末梢神経がまひしたり、皮膚がただれたりするような症状になる病気です。1873年にノルウェーのハンセン医師が発見した「らい菌」という細菌による感染症で、遺伝病ではありません。1943年にプロミンという薬が発見されてから100%治る病気になりました。身体の変形は後遺症によるものです。感染力も非常に弱く、療養所に働く職員で感染した人は一人もいません。近年の新しい発症例もありません。

Q. どうして隔離政策が取られたのですか?

A. 1907年、「文明国」の仲間入りをしようとした日本は、法律を制定して、放浪する患者を収容・隔離し、全国に5つの公立療養所を設けました。富山県も1909年に大阪府などとともに外島保養院をつくりました。1931年、軍国主義が進むなか、癪

予防法が制定されました。国民は貴重な兵力・生産力であり、健康な国民が求められました。「ハンセン病は排除すべきもの」と考えられ、無癆県運動などにより在宅療養の方を含むすべての患者が強制隔離されました。1996年に、法律が廃止されるまで、実に90年以上にわたって入所されている方を苦しめました。

Q. 隔離政策による被害とは?

A. 入所すると、本名を園名に変えられ、逃亡を防ぐために衣服もお金も取り上げられました。厳しい生活環境のなかで十分な治療もなされず、労働を強いられ、病気が悪化した人もいます。また、子孫を残さないように、結婚の条件として断種・堕胎が強制されました。完治しても社会復帰はできず、多くの人は亡くなつてからも故郷に帰れないまま、今も園内の納骨堂に眠っています。

ハンセン病問題ふるさとネットワーク富山

ハンセン病問題ふるさとネットワーク富山は、ハンセン病国賠訴訟熊本地裁勝訴判決(2001年)をうけ、ハンセン病問題の速やかな解決をはかる目的で2004年に結成されました。行政やマスコミのご支援をうけながら、県出身者の皆さんとの交流をはかり、回復者の方々の尊厳と基本的人権の回復、眞の社会復帰をめざして、各地の療養所訪問や各種講演会・交流会などに取り組んでいます。

首都圏教化の課題から僧侶としての歩みを考える宿泊研修

岐路に立つ寺院——寺の存続は自明か——

東京教区東京四組專福寺住職
首都圏教化推進本部本部員

二階堂 行壽氏

昨年度の社会問題研修会では、寺院を取り巻く危機的な状況を経済記者の視点から学びました。研修で示された内容は衝撃的ではあります。しかし、現場にて私たちは、危機的な状況は肌身をもつて感じていると思います。しかしながら、そのような状況は認識しつつも、果たしてどのようにして自坊を護持していくか、僧侶として歩んでいくべきか、そして何をなすべきか、悩みながら、目の前にある日々の法務に追われていっているのが現状ではないでしょうか。そこで、今年度は、富山教区から一步足を踏み出し、東京において、首都圏教化の現状と課題を学び、その事をとおして、今、私たちがどのように歩むべきか、語りあいたいと思います。（開催要項より）

二〇一六年一月十三日から十四日まで、社会教化小委員会主催による「首都圏教化の課題から僧侶としての歩みを考える宿泊研修」が真宗会館を会場に開催されました。本号ではその講義録を掲載します。

いいのかということに対しても、「実験」「試み」をしていくことを含めて、都市教化を考えまいりました。東京教区もここが現場でありますから、東京教区として、どう考えていいべきよいかということももちろんあります。しかし、『都市化』の問題は一教区だけの問題ではありませんので、教団として推進本部を立ち上げて現在に至っているということを紹介いたしました。首都圏教化推進本部（以下「推進本部」）の本部員をさせていただいております二階堂と申します。真宗会館まで足をお運びいただきましてありがとうございます。

この真宗会館ができたのは約五年前です。教団問題で浅草の別院が離脱を受けて、その後ここ練馬に真宗大谷派の首都圏の拠点としてこの教化の施設を構えました。全国の皆さんの御懇意によりこの場所が確保されたわけですが、いま仰っていまだに、全國が『東京化』していくように、全国が『東京化』していくのかといふところが分かっているわけではなくて、どのように向き合い考えたらいいのかと悩みながらの日々ですので、現状の報告と私や推進本部の行っていることを紹介して、ともに考えてまいりたいと思っております。

推進本部は三部門に分かれています。一つは「教化広報部門」。この部門

の事業としては「親鸞講座」に象徴されますが、これは直接的には既存のお寺のご門徒を対象にしたものではなくて、新聞広告やインターネット、また今はだいぶ少なくしておりますが電車の中吊り広告や駅の張り紙等、一般の方々や潜在的な「真宗」に関心を持つておられるような方々に、真宗・仏教に縁をもつていただきことを中心に、現在、講座を首都圏の9カ所（他の名称も含めると12カ所）で開催しております。また、そういう講座をベースとして、本山の御遠忌の事業として始まった「親鸞フォーラム」を引き継ぎ、社会的課題、人間の課題について様々な識者の方をお迎えし、教団の側から大学の先生方や教学研究所、親鸞仏教センターの方々に入っていたりして対話をし、親鸞の教えを広く発信するということを続けております。

それから「開教部門」というのは、首都圏には圧倒的に真宗大谷派の寺院は少なく、新たな寺院の建立やそ

れで頑張っておられます。個人の力だけではなかなか寺院建立ということまでは、特に経済的な面で難しいという状況にもあります。しかし、まいりません。教団として直接お手伝いできることにも限界がありますが、何とか寺院を、またそのように動けるような環境を整えていきたいということが「開教部門」です。

「首都圏」というのは大谷派では、一応東京教区を指す言葉として使われますが、一般的には東京と山梨を指す言葉として使われているようです。昼間の人口は、東京が1550万人くらい、首都圏1都3県、東京都に千葉・埼玉・神奈川県を含めた地域で3700万人、つまり、日本の人口の3割から3分の1ぐらいが集まっているということになります。そこにある寺院数は長野県を入れた東京教区で約500カ寺。東京都内は155カ寺です。千葉・埼玉・神

の形を考えていこうとする部門です。

現在、開教者の方は三十人程、首都圏で頑張っておられます。個人の力だけではなかなか寺院建立といふことまでは、特に経済的な面で難しいという状況にもあります。しかし、まいりません。教団として直接お手伝いできることにも限界がありますが、何とか寺院を、またそのように動けるような環境を整えていきたいということが「開教部門」です。

奈川の3県で100カ寺ありますが、宗教法人数で申しますと、1都3県では2%（東西合わせて4%）と言わせています。ですから、圧倒的に真宗寺院の少ない地域です。

東京教区という地域で申しますと、東京都区内はある程度寺院はありますが、そのドーナツ化と言われる地域には、人口は多いが寺院は少なく、何十万都市で大谷派はゼロというところがたくさんあります。つまり、寺院が不足していると

奈川の3県で100カ寺ありますが、宗教法人数で申しますと、1都3県では2%（東西合わせて4%）と言わせています。ですから、圧倒的に真宗寺院の少ない地域です。



真宗会館（東京都練馬区）

いう状況です。そして、そこからまた少し離れると過疎的な状況も抱えています。そういった三つの地域性を抱えているのが首都圏（東京教区）

というところとなります。

それから私の担当している「真宗

できた施設ですので、いわゆる既存の門徒のないところから始まりましたから、儀式ということだけに中心をおかず、これから真宗寺院や真宗のあり方を模索・実験できないかということで始まりました。しかし二十年以上も経つとやはり最初から深いご縁があつた方々から、「最後はここで葬儀をしてもらいたい」ということなど、様々な相談を受けるようになりまして、現在は仏事も大切な位置づけとして行っています。皆さん方も本日お越しいただいてお分かりでしょうが、ここは来るので決して便利な場所ではありません。しかし、この場所をどのように開いていくかということを考えていかなればなりませんが、これはそれぞれが抱えている寺という場をどのように考え、開いていくのかと、いう課題と同じく、模索しているという面もあります。

少し私の自坊の現状や行っていることについて申し上げて、またご感想をお聞かせいただければと思います。「教勢調査」と「門徒戸数調査」がなされた時に、総代・責任役員・門徒スタッフと、どのようにこの数值を見ようとするのかということでお出しして話し合いました。「教勢調査」では、「お寺から何キロ範囲というかたちで出しなさい」といふことですから、それに基づいて分けました。そうすると自坊の門徒の内、都内が約54%、その内新宿区内が14%。また東京都下（23区以外）が11%、千葉・埼玉・神奈川県が28%、その他が6%となっています。地理的なことが分からぬ方もおられると思いますが、私のところではおおよそ5キロから20キロの範囲になります。交通事情もありますが、一軒のお宅に行くのにかかる大体の平均のアクセス時間は片道一時間から一時間半ぐらいでしょうか。

私のところで子ども会を年に数回行っておりますが、子ども会に参加する門徒はゼロです。参加は地域の子どもたちでほとんどが他宗です。中には真宗の家の子どももいるかも知れませんが、真宗の寺で行っていますから来るのではなく、友達のつながりで来てています。ですから寺があるとそこが自分の関係する場所だとしてもそこが自分の関係する場所だと考える人は周りにはほとんどいません。自坊のデータを話しましたが、よほど下町の方へ行つて昔から人とつながりが強いところはかるうじてあると思いますが、都内の寺院はみな同じような状況ではないかと思ひます。

それから「葬儀」の状況ですが、いわゆる「直葬」と言われるものが、昨日も葬儀社の方と話しましたが、一般的には三割と言われています。しかし、葬儀社の方も三割は超えているだらうと言つていました。

また、「家族葬」と呼ばれているものは私のところでは60%を超えていよいよかと思います。家族葬の程度にもよりますが、近隣の親しいおじいちゃんやおばあちゃんが二、三人いることもありますから、それが家族葬でないと言えれば少しパーセンテージは落ちますが、ちゃんと「誰々が亡くなりました」と地域に広報を出して、誰もが参りに行けるような状況になつてゐるかというと、ほとんど町内会の張り紙はしません。それは商店街もそうです。商店街の方は、店に来てくれる人たちや商店街の店同士、仲間で成り立つていてるわけですから、「それをやらなかつたらあんたたち食べていけるの?」という話ですが、やはり、なるべくこじんまりしたいのです。皆さんがお聞きになつた経済の話を私は聞いておりませんが、やはり経済的な側面というのは、否めないのでないかと思います。

るのは、ご兄弟や甥子・姪子という形での葬儀がどんどん増えてきております。

「異姓相続人割合」と書いてありますが、私のところでは10%ぐらいです。どういうことかと申しますと、山田家という墓があって、その山田家にはその跡を継ぐ方がいないけれど、例えば娘さんが吉田に名前が変わったけれど、山田家のお墓を閉じないために墓地存続の責任者となっているという方の割合です。それに連絡が取れていない方が3%おられますので、約13%の方は次の代になつたら難しいというような状況であります。これはもつとどんどん進んでいくと思います。「どうしたらしいのだろうか」という相談をよく受けます。お墓も確かに大切ではあります。お墓も確かに大切ではあります。お墓ということがあります。寺の側が真宗寺院をどり考へるのかは、ご門徒の問題でもあります。寺の側が真宗寺院をどう考へるのかの問題でもあります。

同朋新聞に掲載されましたが、教勢調査の中で「過疎の地域の具合に

注目したい」と報告が出されておりました。「葬儀の回数は減っているが、法事の減り方は都心からすると減少の割合は少ない」ということで、丁寧にしていることが調査結果から読み取れると報告されています。東京はそういう意味で言うと、お寺の規模は様々ですが、縁が切れてしまつたらもうそのままになるというお寺が多いという結果です。東京都心の寺は先ほどのように地域に門徒さんがいないので、日常は門徒さんとの付き合いはゼロと言つていいです。信仰の中身ということで言えば、東京は墓参り文化（信仰）と言つていいかと思います。本堂に上がつてお参りするのは法事だけです。掲示は出していますが、彼岸・お盆・年末年始、あと命日にお参りに来られるのは、すべて墓です。お骨信仰が非常に強いのです。関東 자체がそういう状況が強いかと思いますが、

とても、なくともいい。墓さえあれば」という感じが強いかと思います。1999年に岡崎教区のある組へお話しに伺いました。これは、私たちの組で葬儀の本（『真宗門徒の葬儀』）を作ったのですが、本を作つたものを呼ぼうということになったようで伺いました。この地域では、1998年まで9割以上が自宅で葬儀を行つていたということですが、しかし駅前に葬斎場ができた翌年には、9割がその施設で葬儀を行うということになつたようです。一年間であまりにも変わりすぎて、住職も門徒会の方々もどう考えたらいいのか全く分からぬので来てほしいということでした。

また、高山でもお話しをする機会があつたのですが、その懇親の席で、やはり葬式が話題になりました。これも岡崎教区と同じで、駅前に葬斎場がてきて、自宅で葬儀が行われなくなつたということです。高山市内

から少し離れたところにある村では、当然そこでお葬式をしていたのです。遠方でも住職が東京に出て来られ

が、例えば、葬儀を出されるお宅の息子・娘さんが名古屋に勤めているために高山まで来て、さらにそこからバスで移動となると時間がかかる。駅前であればお参りをして、また名古屋まで帰ることもができます。式場のバスで自宅と式場を送迎してくれるサービスがあり、そういうことを今後どのように考えたらいいのかということをおっしゃっていました。式場のバスで自宅と式場を送迎してくれるサービスがあり、そういうことを今後どのように考えたらいいのかということをおっしゃっていました。式場のバスで自宅と式場を送迎してくれるサービスがあり、そういうことを今後どのように考えたらいいのかということをおっしゃっていました。式場のバスで自宅と式場を送迎してくれるサービスがあり、そういうことを今後どのように考えたらいいのか

区・高田教区)があります。上越新幹線が早くにできたということもあります。三條・高田の方は、東京まで葬儀に出て来られるということです。また、お盆等のお参りにも、この真宗会館に宿泊されるなどして、都内をお参りに回られるという方もおられます。

皆さん方の状況が詳しく分からぬといふこともあります。どのようないいとあることもあり、どのよう話をしたらいか分からないます。お配りしているものもござりますので、東京の一寺院の一住職の行つてることですが、お話し申し上げます。手元の封筒の中にいろんな色の付いた紙が入っています。それは「通夜」や「葬儀」、「収骨」に配るもののなどです。皆さんのこところは昔ながらの長い伝統の中にあって、「正信偈」などはお勤めできる方がたくさんおられると思いますが、東京では全くそういう生活はありません。「葬儀や通夜、法事の時には何をやっているのか全くわからない」とよく聞きます。私も他宗のところ

へ行くと、何をしているのかその意味が分からない場合があります。些細なことです。お通夜や葬儀で、今何をしているのかを分かるように次第などを渡しております。

またお通夜の次第の順番を少し変えています。正信偈と念讃の間に『御文』を入れています。なぜかと言ふと、今は家族葬が多いので、そういう必要も少なくなってきたいますが、十数年前までは葬儀より通夜の方が会葬者が多く、また東京の場合はお通夜で食事(お斎とは呼べません)を出すのです。会葬者はお勤めに一緒に座りませんので、焼香をして、食事を食べて帰るみたいなものです。それでお勤めをしていると、喪主の方がもう不安なのです。司が来ているのではないかなど、意識は会葬者に向いているので、お通夜にならないのです。ですから、私のところでは、葬儀社に必ずファックスを送るのですが、お通夜を三十分前から身内だけで始めます。少しお話をして、『正信偈』を皆でお

勧めして先に『御文』を読んで法話をします。その後、親族、会葬者の順でお焼香してもらいますが、本を配っているので一緒にお勤めをされる方もおられますが、そうでない方はもう仕がないといった感じです。しかし、そういうものを配っていると、火葬場に行った時や還骨で、質問や感想が出やすくなります。日ごろ顔を合わせている方の葬儀だと、こちらも悲しみを共にしあわい話し易いのですが、申し訳ないことに、会つたことがないと言つたら変ですが、ゆっくり話したこともない人が坊さんと何を話したらいいのかと困られる方もおられ、プリントを配つていますと、少し話の手掛かりともなります。

「七日参り」などは私のところでは、先程申し上げましたように片道一時間半ぐらいかかりますので、不可能に近いです。皆さんには「そんなこともやつていかないのか」と思われるかもしれません、葬儀が終わつた後七・七日(四十九日)にお骨を

お寺に持つて来られて納骨されるまで、ご遺族の方のお顔を見ることはないと言つていいでしょう。ですから、私(住職)が死ぬまで門徒の家のお内仏に一度も参らない門徒宅があることになります。そんなこともありますけれども、私が住職になってから、葬儀が終わつてから七・七日までの間に一度は家に行くというようになります。東京の人間は他の人を家に呼ぶということはほとんどないで、自分の家に全然知らない人が入るのを非常に嫌がります。でも、こちらで葬儀後のお参りを入れた予定表を作つて行かせてもらつています。真宗が七日参りをきっちり行つてきたということは非常に大きな財産だと思います。門徒宅へ行くと、向こうの土俵でこちらはお話をするわけですから、向こうもこちらとの関係を大切に受け止めてくださいます。

東京でも丁寧にお参りに行かれて

いるお寺の方もおられましようが、これにはいくつか理由もありますが、一つは空襲です。昔から真宗の土徳のないところに、空襲で家が焼かれ、また疎開していて、行つても家がないのですから、どんどん立ち消えになつていったことがあるようです。これはいい訳でしょうか、そういう中で、あらためて家の内仏の前でということだが、いかに大きな力を果たしてきたのかということを少し感じています。そういうことを真宗はずっと守つてこられたのでしょ。地方の方から、真宗の生活といふことをあらためて学ぶ必要があるのだと思います。

東京教区の近田昭夫先生が、「寺に百人集めようと思ったら大変な話だけれども、法事で、例えば十人ずつの法事が十回あれば、それで聞いてくれる人は百人いるわけでしょう。そこでちゃんと仏法を丁寧に伝えれば、一回やつて何百人集めました、お話を聞いてもらいましたという必要なではないのではないか。日々の法要はないのではないか。日々の法

事なら法事、仏事を丁寧にちゃんと勤め伝えていくことの方が早いのではないか」というような話をされました。なるほどと思いました。

施主がもちろん大事なわけですが、集まつていただいている方々も大事です。東京では先ほどのような状況ですので、集まつておられる方も他宗の人が多いわけです。真宗といふことも、もちろん宗派名を示すといふこともあります。親鸞聖人は宗派名ではなくて、「眞実を宗（むね）とする」、「淨土こそ眞のよりどころ」と表現されました。「まこと」といふことは宗派を超えているわけでしょう。「眞宗では」と言わなければならぬ事柄もありますが、「大乗の至極」と言いおさえられるように、宗派ということを超えて「眞宗」を伝える。これは、かえって施主以外の人に響く場合があります。我々もそうですがれども、主催者になると、「次は何だったかな」、「お斎の時間・人数は？」などと、そんなことばかり考えてしまいますから、あまり聞

いていない場合も多いのです。でも、親戚の方は、そういうことは関係ありませんからゆつたりしています。そういう人たちが、自分のところとはどうも違うということも含めて、非常に頷いてくれる方が多いように思います。そういうことを地道に繰り返すしかないなというように思います。

私はいま組長そくちょうなのですが、門徒からは「住職が何を考えているのか分からぬ」とよく言われます。これは多くの門徒会員の意見です。組門徒会の常任委員の方から、「寺離れ」と言うけれども、寺離れじゃなくて寺族の門徒離れだ」と言われました。寺を見捨てて門徒が離れていくのはなくて、寺の者が門徒を突き放しているのではないかという言い方です。そういうことを直接言われました。別紙は本山でのある会議に出した討議のための資料ですが、

とにかく住職・門徒がお寺やお寺の行事、そして今後お寺をどう考えていくのかということについて、一度もお互い話したことがないということが、東京四組のお寺の現状です。そのような中にあって、教区から各組のテーマを決めてください」と言されました。しかし組のテーマを決めたとしても、それはまたどこで誰か決められたことになると意

今年度の組門徒会研修（年二回程度開催）の内容を決めるに当たつた。たうえで、その数値から何を読み取るのかが大事なことではないか

味をなきないので、私どもの組では、まず各寺のテーマや課題を出して欲しいと各寺にお願いしました。その際にメンバーは、住職・坊守・門徒会員・その他の門徒が必ず入るようとしなければならない背景を門徒さんや門徒会員の方に伝えたのです。寺の行事や教化のことを話してといわれても、住職も門徒も慣れていませんから、どうしたらしいのか分からぬわけです。ですからテーマはともかくも、その寺の課題を出してもらうことで、話すきっかけとしようとすることにしました。その各寺のテーマや課題をもとに、組のテーマとして組み立てていったのですが、組のテーマがどうしても気に食わないという人であっても、「自分のお寺のテーマは門徒と共に話し合った」ということは間違いないので、組内には20カ寺ありますが、全部公表しているので「あなたのところのテーマはどうか」ということを門徒会員同士で話せるのです。そうなると、

お互いにまた住職と話そう、門徒と話そうということが出でまいります。テーマや課題も大事なことですが、その前の段階、とにかく寺の今やこれからについて話す場を開くことから始めるということです。

とにかくこの住職が何を考えているのかということを、様々な機会を捉えて発信していくことしかないのでないかと思います。自己満足という面もありますが、伝えるということを通して通しながら、もう一度何が伝わっていなかつたのかということを伝えないと伝わっていないということを繰り返していくことが大切なのではないかと思います。そうすると、文句を含めて必ずいろんな形で声が出てきます。それが大切なのはないかと思います。

皆さん方の状況が十分に分からな
いまま話しておりますが、お手元に
ある袋の中に「首都圏仏事代行」の
パンフレットが入っています。推進
本部の取り組みの一つですが、ご門

徒が地方から東京に出て来られて葬儀となり、分けのわからぬまま葬儀社のペースでいろいろと進んでしまったということもよくお聞きします。よくわからない僧侶だったということや、今は葬儀社が僧侶を職員として抱えている場合もあります。そういう状況の中で、地元のご住職と門徒さん、真宗会館（推進本部）、そして本部でお願いしている執行者（教区内住職、開教者など）と連携をもつて少しでも真宗のご縁につながる葬儀を勤めようというものです。そのお布施については執行したものが6割をいただき、地元のお寺で法名をいただくということを含めて3割、そして会館が事務的な費用として1割をいただくという形で仏事の代行を行っています。

儀のお勤めをすることになります。ですから、例えばお布施が10万円だとしたら、3割戻し（紹介料）となると3万円が葬儀社に入つて、7万円が寺にということになります。それがもう5割以上だという話も聞きます。また先ほど申しましたように、葬儀社がもう職員として僧侶を抱えていることにもなっているようです。これからまだまだ老人の割合が増え、葬儀が増えると言われていますが、東京は火葬場が間に合わないのです。ですから日にちがどんどん伸びます。その間のご遺体の保管にかなりの費用がかかります。火葬してから葬儀を行うということを考えざるを得なくもなっていくでしょう。どういった形が本当に葬儀を縁としてご門徒とながつていくことになるのか、そういうことはまだまだ考えていかなければいけない問題が多いと思います。

私のところの寺もそうですけれども、お盆とかお彼岸とか行事を抜けば、東京の寺は土日だけです。土日

に法事が集中しますから、他の日はほとんど空いている状況です。私のところは「野机」が二つあり、一つは本堂用で出すのが大変なのですが、もう一つはちょっとした小さい部屋で簡単に作れます。三十分もあればセットできるのですが、それを用意しています。お寺の式場使用礼を含めて、なるべく費用を抑える形で葬儀を行っています。門徒全てが使えば無料でもいいのでしょうが、新宿にいる門徒さんは少なく遠方の方はお使いいただけないので、ある程度費用をいただきます。それでもどこかの式場を借りて祭壇をかざってというより、圧倒的に費用が抑えられるので、リピーターが多いのです。世間では低い葬儀費用の宣伝もしていますが、それも含め、真宗の葬儀を出してよかつたといえることがどういうものなのか、考えていく時代にもなっていましょう。

寺という場所を、どのように考えるかということをいろいろな角度から、もちろん門徒さんも含めていろ

いろな人たちと考えていくことの繰り返しだと思います。真宗教化センターでウェイクアップセミナーというものがありますが、名前や方法については、いろいろ意見もありますが、その中で「三六〇度診断」といいうものを行ったお寺の話を聞きました。住職が当たり前だと思っているようなことが、地域の人や門徒さんからするといい面であったり、また自分のところではこんなことをやっていると自信をもついて、周りは認めていなかつたり。寺に対しても見方が、住職や寺の者の見方と周りの見方とは全く違うということでした。違う角度からの声に驚いたという話でした。

コミュニケーションデザイナーの山崎亮という人と大谷派が一緒にチームを組んで根室別院で「みんなの生き方ラボ」というものを行っています。その山崎さんの話を聞いていたら、もう各地で地方再生をして人が集まるようにしていくには限界があるということでした。彼は、今まで人がいなかつた過疎のところに人を呼び寄せるというプロフェッショナルで、あちこちで成果を挙げてきたのですが、地域によっては人が増えれば増えるほど、インフラの整備が大変になると言うのです。ゴミの問題をはじめインフラの整備を考えていまくと、税金等の負担が大きくなり、また問題もでてくると。そんな中で、山崎さんは自分の考え方を変わり始めたそうです。ここで安心して生き、そして生涯を終えていける、そういう安心して生活のできる場所として、その地域を考えるというのも一つである。そういう場所として考えられないかというのが、根室でのプロジェクトのようです。そこに必要なのが、病院とお寺とその地域の人のつながりだと。

また、「Uターン」と「Iターン」とあるが、その間に「Jターン」というものを言わされました。Uターンができるのかを地域やお寺で、もつとお互いに出したり語り合ったりすることは一番大切な時期ではないか

いうのは、魅力あることを打ち出しひ寄せるというプロフェッショナルです。Jターンというのは、これは九州の大学のある教授が言われたようですが、九州の人口動態を見ていますが、自分の親のところには仕事をも、自分の仕事場と親の住んでいる地域との間に家を建てている人が很多い、と。それをJターンと呼んでいるようです。地元に戻つてはいないのだけれども途中まで戻ってきたのです。そうすると、親の面倒も見られるし、仕事にも行けるのです。そして自分の故郷を、例えば自分たちの趣味の場所などとして回復していくということのようです。これは九州という場所でのことかもしれないが、病院とお寺とその地域の人のつながりだと。

これは九州という場所でのことかもしれませんが。これは真宗とは直接関係ないのですが、それぞれが抱えている状況の中で、何を根っこにし、何ができるのかを地域やお寺で、もつとお互いに出したり語り合ったりすることを思っています。

いうのは、元々地元だった人が都会に出て、Uターンして地元に戻つてくるということです。Iターンと

どこにいても情報はインターネットであつて、同じ間に同じように受け取れますので、意識はほとんど変わらない面もあるのではないかと思います。しかし、その意識を支える日常生活感覚は違うのではないかと思います。もちろん東京化されいく面もありますが、日常の中で例えば、私のところはまだ土が少しはあるのですが、浅草のお寺に行くと土があるお寺は少ないかと思います。お墓は全部石かコンクリートが敷き詰められています。都会全体がそんな場所です。そういうところで暮している都会の方の生活、物の見方・考え方・生き方と、土に触れながら生きている地方の生き方とは大きく違うのではないかとも思います。ですから、東京が抱えている形、アプローチの仕方と、それぞれの地域の文化が異なりますので、それぞれ考えざるを得ないという面もあるうかと思います。

真宗会館で「子ども食堂」というものが始まりました。これは我々会館側からのアプローチというよりも、法務等で会館に縁のあった方からの話でした。今の日本の子どもの貧困率は非常に高く、6人に1人といわれています。夏休みなどは、新学期が始まると瘦せて学校に来る子がいります。毎朝、親から五百円もらつてこれで一日食べなさいと言われます。学校があるときは、まだ昼に給食がありますが、休みになると聞きます。親から五百円組門徒会を担当しました。だんだん村人が減り、寺の行事を担つてもらわざる若き人たちが全くいないということを言つておられました。そのことについて、こちらから「こういうふうにしたらしい」というアドバイスは一切言えませんので聞くだけでした。いろいろ話された中で、「私たちは何を受け止めてきたのか」ということが、はつきりしていなかったのではないか」ということが出てまいりました。

お寺というのは浄土真宗の場合、道場から始まったということですが、きっと地域においてかけがえのないコミュニティの中心だったに違いないのです。それを今から、何か「派手なことを」という必要もないのですが、しかし、どういう「場」をして真宗の寺がその地域に位置づけられてきたのかということを考えていく必要があるのでしょう。都会のあり方とそれぞれの地域でのあります。しかし、その意識を支える日常生活感覚は違うのではないかと思います。そこで、私がこれまで受け止めてきた人たちが、何を受けて止めてきたのか分からぬまま、形だけを次の世代にということです。受け止めてきた人たちが、何を先祖から受け止めてきたのか」というようなことをはっきりさせることが大事なのではないか、というような話でした。

手がないということでしたが、そういう行事を通して、「私たちは何を先祖から受け止めてきたのか」というようなことをはっきりさせることが大事なのではないかということです。受け止めてきた人たちが、何を先祖から受け止めてきたのか」というようなことをはっきりさせることが大事なのではないか、という手がないということでした。それで、その形を通して本質的な願いに触れていくということがなければならないのでしょうか。そこで話題になつたのは「行事の中で、これは誰がやるのか」という、担い



(了)

親鸞会報告～私たちの教化の姿勢が問われる～

二〇一六年三月十日、推進員養成講座Bブロック第一回の前日打ち合せを終え、会場寺院から帰ろうとした矢先、携帯が鳴りました。浄土真宗本願寺派（西本願寺）の観勢寺が親鸞会に譲渡されるという件で、横越（上市町）の門徒さんが相談にいらしてるので早く帰れという電話でした。びっくりして帰って事情を聴きますと、横越全住民に十九日、住民説明会が開催されるというチラシが配布されたという事でした。この日から私の混乱した毎日が始まりました。

私は本願寺派富山教務所、当該の立山組長を尋ね、情報を集めました。宗教法人の解散手続きを進めていた観勢寺住職が、突然宗派を離脱し、単立寺院となつて親鸞会に役員交代しようとしているという、驚くべき内容でした。そしてもう、離脱されてしまっては手の施しようがない、という空気が漂っていました。

実際に維持に行き詰った本願寺派住職自身の親鸞会についての知識は

二〇一六年三月十日、推進員養成講座Bブロック第一回の前日打ち合せを終え、会場寺院から帰ろうとした矢先、携帯が鳴りました。浄土真宗本願寺派（西本願寺）の観勢寺が親鸞会に譲渡されるという件で、横越（上市町）の門徒さんが相談にいらしてるので早く帰れという電話でした。びっくりして帰って事情を聴きますと、横越全住民に十九日、住民説明会が開催されるというチラシが配布されたという事でした。この日から私の混乱した毎日が始まりました。

この後、私は大谷派富山教務所を通して青少幼年センター嘱託の京都教区、瓜生崇さんを紹介していただきました。既に彼とはフェイスブックを通して友達になつておらず、的確なアドバイスをいただいています。この事件に親鸞会のどういう意図があるのかを教えて頂いたことが、この後の展開に大きな影響を与えたと思います。

「寺の参詣は減少し、葬儀も行われていない。そんな寂々とした東西本願寺寺院に比べ小杉の親鸞会館には目を見張るような数の人々が聴聞に集まっている」と、親鸞会は世間にアピールしてきました。そして実

十分ではありませんでした。学生や会社員だった頃に何度も勧誘をうけました。教区の研修会に参加したこともあります。しかしあ手次のご門徒さんのすぐ近くにこのような事が起ころなければ、この問題についてここまで関わらなかつたと思います。

三月十九日の親鸞会による住民説明会の内容については三月二十六日付の『文化時報』に詳細に書かれてあります。また、興山舎『月刊住職』五月号も親勢寺問題について丁寧に記事にしています。この号の『月刊住職』には、過疎、人口減少に悩む地方寺院の抱える問題や、不活動宗教法人の売買問題という、親勢寺事件の背景について参考になる記事がありますので、ぜひ一読されることをお勧めします。

説明会では住民から親鸞会譲渡に反対する意向が示されました。それでも観勢寺住職は譲渡にこだわり、二か月にわたつて本願寺派も交えて交渉が続けられました。しかし残念ながら不調に終わり、譲渡されることがほぼ決まりました。（五月十七日現在）

が親鸞会に寺を寄付すると申し出でました。そこを参詣者でいっぱいにして、いよいよ親鸞会の時代がやってきたと。これまで東西両本願寺批判によって大きくなってきた親鸞会にとって、主張してきたことが現実になる最初の事例が親勢寺になるであろうというのです。

三月十九日の親鸞会による住民説明会の内容については三月二十六日付の『文化時報』に詳細に書かれてあります。また、興山舎『月刊住職』五月号も親勢寺問題について丁寧に記事にしています。この号の『月刊住職』には、過疎、人口減少に悩む地方寺院の抱える問題や、不活動宗教法人の売買問題という、親勢寺事件の背景について参考になる記事がありますので、ぜひ一読されることをお勧めします。

説明会では住民から親鸞会譲渡に反対する意向が示されました。それでも観勢寺住職は譲渡にこだわり、二か月にわたつて本願寺派も交えて交渉が続けられました。しかし残念ながら不調に終わり、譲渡されることがほぼ決まりました。（五月十七日現在）

親鸞会は活発な動きを見せています。

第十一組 玉永寺 石川正穂



さよなら親鸞会

著者 瓜生 崇(うりうたかし) 價格 300円(税込)

著者は、「浄土真宗親鸞会」という新宗教に勧説され入会し、熱心な信者となり、伝道布教活動にいそしんでいた時期があつたが、紆余曲折を経て脱会し、今は伝統教団である真宗大谷派の寺院住職をしている。なぜ親鸞会に入ったのか。入っている間はどのように考えどのような活動をしていたのか。どのようなきっかけで脱会したのか。そしてそれを今はどう受け止めどのような活動をしているのか。親鸞会でのことも、今の思いも、ともに率直に語られている。

※書籍の購入につきましては、富山教務所までお問い合わせください。

『如大地』編集委員会

五日間、登高座における作法や読法の基礎を教えていただきました。今まで登高座ということは、ただ見ているだけだったので、深く関心を持っておりませんでした。

しかし、今回の講座を受けるにあたって登高座がどうしたことあるかを釋氏先生より教えていただきました。

また、一つひとつ動作を正確に行うことで作法の大切さを学ぶことができました。そして、何より仏を敬うことの大切さを改めて感じま



講習会の様子

今後はこの講習会で学んだことを忘れず、そして自信を持つて出来るよう日々練習をしていきたいと思います。

二月二十二日から二十六日までの五日間、登高座における作法や読法の基礎を教えていただきました。今

した。

短期間で作法を習得することはとても大変でしたが、他の受講生の方

の動作を見るごとで自分の間違いに気付けたり、空き時間に受講生同士でお互いを客観的に見て、指摘し合えたのは凄く良かったです。

研修会報告①

富山教区「登高座作法講習会」を受講して

教授師 大谷 浩之氏(鍵役)
釋氏 昭彦氏(本廟部定衆)

会場 富山東別院会館

[2/22~26]

研修会報告②

「首都圏研修」を通して思うこと

講師 二階堂 行壽氏

会場 真宗会館・築地本願寺ほか

[1/13~14]

社会教化小委員会では、一〇一四年度より「岐路に立つ寺院——寺の存続は自明か」をテーマに社会問題研修が行われてきた。

初年度には、日経ビジネス記者の鶴飼秀徳氏をお招きし自らの著書『寺院消滅』の取材を通して、崩壊していく寺の現状を語っていた。我々の地域においても都合に倣うように斎場葬儀が一般化し仏事の在り方が変化して久しい。

同時に門徒の寺に対する意識も明かに変貌している。そこで今年度は首都圏（大谷派では東京教区を指す）での現状と課題を見聞し僧侶として



二階堂氏による講義の様子

の歩みを考える宿泊研修が一月十三日より一泊二日の日程で行われた。

参加者は教務所員二名を含め総勢十三名。ちなみに女性は私ひとりで少々心細かったが同じ教区の中で初めてお話を聞く方もいて研修への期待が膨らんだ。

一日目。北陸新幹線で到着した東京は一月だというのに穏やかな快晴だった。宿泊先の真宗会館には電車とバスを乗り継いで入館。ここでは

だいた。専福寺では門徒の大半が片道一時間半以上の場所に住んでいる。そのため地域としての関わりは無く葬儀まで会うことのない門徒もいるという。お骨信仰の強い環境も併せて寺を訪れるのは墓参りくらいだという。葬儀においても六割以上が家で族葬ということだ。

しかし一方ではまた人間関係の希薄さの中で生きあぐねている人々も多く存在している。いかなる時代においても生きる意義を問わずにはいられない私たちがいる。そこに寺が伝えられることは何なのかな。

二階堂氏は、だからこそ寺からの発信が重要だと指摘された。我々が先祖から受け止めてきたものは何か。その中で寺が成り立ってきた原点とはいったい何なのか。そのことを共に時代の中で考えていかなければならぬと話された。また、資料として提供された葬儀社への冊子や門徒へ配布されるリーフレットには、真宗大谷派の通夜や葬儀の在り方と、その根拠が丁寧に説明されている。根拠が明快だから分かり易く相手にも伝わる内容であった。

翌日は築地本願寺に参詣。築地場外で昼食を取り、浅草の通覚寺住職（東京教区東京第四組専福寺行壽氏）より首都圏寺院の現状と御自



浅草にある通覚寺

稻垣信夫さんのご好意で都心にあるモダンなビルのお寺を見学させていた。副住職の稻垣和弘さんより寺の現状を伺う。此処でもまた都会ならではの問題を抱えてはいたが和弘さんご夫妻が積極的に子ども会などの活動をしているお話を印象的だつた。

今回の研修では、現状を憂い対策を論じるだけでは何も変わらないことを改めて思う。何事も分かつたことをとして生きているから、どこまでも切実になれない。何もできない、何も分からぬという身に目を覚まされて初めて問題の根拠が見えてくるのではないか。

三月八日から九日にかけて「二〇一五年度富山教区秋安居」が開催され、本多弘之先生を講師に約二十五名が参加しました。秋安居を開催するにあたって、事前学習会として講録の輪読を行ない、本多先生は事前に学習会を持つ教区はあまりないと大変喜んでおられた。

冒頭、私達の力を抜くためなのか「仏法は、聞けば聞くほど訳が分からぬ」と言われたが、最近は歳をとったせいか、少し分かるようになつたと語られた。

講義の中で、「観経往生は双樹林下往生で、親鸞聖人は死んだら往生という事は言つてない。それならば、仏法を聞く必要がない」



講義の様子

た。

第十一組 岩隆寺 金山哲成

研修会報告③

富山教区「秋安居」開催

講師 本多 弘之氏（真宗大谷派講師・安居本講講者）

会場 富山東別院会館

【3／8～9】

と話された。また、「親鸞聖人の救いは難思議往生であり現に今、現生の救いを言っているのだ。信心を獲ると私達は光の中にあるという知恵を与えられる。単に闇を生きているのではない」と述べられ、「光明攝く、淨土にいるがごとし本願力の働きを頂くのなら、

如來と共にありと
いう如來大悲の働き
の中にあり、そ
れをになって立ち
上がるのが法藏菩
薩である」と言わ
れた。

講義を聞いて
「この心を頂いて
生きるのが大事で
ないか」との言葉
が私には一番残っ
た。坊守さんやご
門徒の方の聴講も見えた秋安居であつ
ます。

まずは、事前学習会と併せて三日間ご多忙にも関わらず、関係者の皆様には、とても親切丁寧にご指導ご協力をいただき心より感謝申しあげます。

さて、日ごろ自坊でも家族とともに勤行をしていますが、自分が調声

「ただ漫然とではなく、自らの意志で得度しなさい」。この言葉だったかどうか記憶は定かではありませんが、しばらくその時が訪れ、先日「得度研修会」に参加させていただきました。

研修会報告④

富山教区「得度研修会」を終えて

会場 富山東別院会館

【3／29～30】



夕事勤行の様子

この研修会を通して、将来を担う頼もし子供達や仲間、優しく的確に御指導下さる先輩僧侶の方々に遭遇ことができ、数々の発見もありました。このご縁と飾らない自分を受け止める覚悟をもつて、得度式に臨みたいと思っています。

第十組 浄光寺 齋藤美和子

研修会報告⑤

「御本尊還座式・御修復完了奉告法要」団体参拝

げんざいき

会場 真宗本廟（東本願寺）

【3／31～4／1】

三月三十一日から四月一日までの「御本尊還座式・御修復完了奉告法要」富山教区団体参拝は、当初の八〇名の募集定員に対し、一〇〇名を超える参加申込があったため急遽バスを二台から三台へと変更しました。初日はお昼までに御影堂へ入り、勤



御本尊の還座列

行の後、阿弥陀堂へ移られるご本尊を目の当たりにしました。翌日は金箔まばゆい阿弥陀堂での法要にブルジルから居を移された大谷暢裕鍵役が前日の還座式に引き続き出仕され、修復完了の盛大な法要が厳修されました。この還座式で大谷派が大きな変わり日を迎えていることを実感しました。

今回の団体参拝を行うにあたり、駐在教導と相談して、内容については門徒研修小委員会で検討しました。本山への団体参拝は、全国的に下降傾向であり、懸念されています。注力したのは、つぎの三点です。

- 一、団体参拝は教区事業であり共通理解を高める意味で、PRと申込をお手次の寺を通すこと。
- 二、参加住職に移動（車内）法話を依頼すること。
- 三、京都上山を本義として観光にも工夫をこらすこと。

結果として、記念事業でもあり参加者が増え、「いい時に、いい所を見せてもらった」という声も多数の方から聞きました。むしろ今回の際立った成果は、ミニ百人百話ともいえる移動法話でした。往復九人の住職法話は、それぞれ休憩時間に乗り換えてもらい、持ち時間約二十分というものです。内容は、自坊の法話と違つて聞き手の集中度もあり、切り口も身近で多岐に渡つたものでした。

点が違っていても締めは、聖人のみ教え、阿弥陀様の働きと論旨は明解です。かしこまって聞く法話とは、一味も二味も違つて新鮮に受けとめられました。



還座列を囲む大勢の参詣者

概して法話は、専門用語の解説にして大地に根ざした仏縁を説かれると、「なるほど」と頷けます。総じて、生活感や実体験を踏まえた語り口だけに、分かりやすいと好評でした。

団体参拝へのささやかな試みでしたが、関係者の協力でそれなりの成果があつた

と思っています。門徒の立場で、できるところから手がけることの大切さを改めて感じました。

「平成28年熊本地震」災害救援金の御礼

去る4月14日及び16日に発生した「平成28年熊本地震」により、熊本県を中心に基甚大な被害が発生しました。被災された皆様に、心からお見舞い申しあげます。

また、富山教区では、4月20日に開催された教区会参事会・教区門徒会常任委員会の決定に基づき、各御寺院及び組門徒会員へ救援金勧募のお願いをさせていただきましたところ多大なる救援金を頂戴いたしました。

皆様のご厚情に対し深く敬意を表しますとともに衷心より御礼申し上げます。

このたびお預かりいたしました救援金につきましては、富山教区の共済会計とともに6月9日に災害救援本部（本山）へ振り込みさせていただきました。

教区内救援金	2,777,142円
救援金箱他	67,216円
教区共済金拠出額	155,642円
教区合計	3,000,000円

※2016年6月9日現在までの災害救援本部（本山）への振込み額

退任のご挨拶

龜渕 卓



このたび、一身上の

都合により宗務役員を
退職することとなりま
した。二〇一四年七月

に着任以来二年間、富山教区の皆さんには
一方ならぬお世話になりまして、本当に有
り難うございました。この教区において何
事をなしえたか、と問われればいささか心
許ないことではあります、多くの方々の
ご指導とご鞭撻をいただき、何とかその責
事を全うできただけではないかと思います。

私にとって七ヵ所目の任地が富山であり
ました。富山湾岸沿いの七尾からいつも見
ていた対岸・魚津方面の立山連峰。二〇一
四年四月には、教勢調査の報告会で研修部
長として訪れた富山。まさかその地に三ヶ
月目に赴任するとは思つてもみませんでし
た。今後は草深い七尾の地で、手をかざし
て立山連峰を見ながら念佛の教えに学んで
参りたいと存じます。短い間でしたが誠に
有り難うございました。

着任のご挨拶

富山教務所長
富山別院輪番
幽溪 浩



富山教務所長
富山別院輪番
幽溪 浩

このたび、六月二十九日付けをもちまし
て富山教務所長兼ねて富山別院輪番を拝命
し、過日着任致しました。

御当地は、二十年ほど前にも主計として
三年半お世話になりました。久しぶりにみ
る富山教区は、境内にありました旧本堂は
すでになく、駐車場も広く整備がなされて
おりました。本堂も随分と景観がよくなり、
周辺の整備がされ、その変貌ぶりに驚いて
おります。

さて、教区では今年度の教化事業の取り
組みとして、先般開催の教化委員会におい
て『語り合い』ということを中心に捉え、
今多くの人が語り合いを求めており、やり
方を様々に工夫して進めるという方向性が
確認されたことあります。
今後は、皆様のご温情とご教示を賜り、
微力ながら精一杯務めさせていただく所存
でありますので、宜しくお願ひ申し上げます。

教区だより

(敬称略)

宗派経常費完納御礼

一〇一五年度宗派経常費を御完納いただき誠にありがとうございました。
ここに完納寺院をご披露し、御礼にかえさせていただきます。

(一〇一五年七月一日～一〇一六年六月三十日)

第九組
 茶屋
 西光寺 光圓寺 西光寺 長澤
 寶林寺 寶堂寺 永源寺 中堂寺
 善通寺 禮行寺 速成寺 本覺寺
 護念寺 深妙寺 樂圓寺 慶正寺

第十組
 圓命寺 蓮照寺 永福寺 專福寺
 善久寺 安正寺 善性寺 本行寺
 西元寺 照念寺 西元寺 傳長寺
 西光寺 真證寺 勝光寺 净光寺
 寶廣寺 廣際寺 真成寺 乘善寺
 本廣寺 養照寺 西源寺 長福寺

第十一組
 真行寺 照念寺 真行寺 持專寺
 西光寺 西圓寺 真廣寺 念法寺
 本覺寺 西圓寺 本廣寺 養照寺

第十二組
 託法寺 長圓寺 勝樂寺 安成寺
 神久寺 常德寺 照善寺 照善寺
 圓覺寺 圓乘寺 敬恩寺 敬恩寺
 常念寺 光曉寺 專正寺 得念寺

第十三組
 樹德寺 西照寺 法潤寺 願宗寺
 淨慶寺 得性寺 勝福寺 得性寺
 光誓寺 長樹寺 相順寺 真宗寺
 光泉寺 念興寺 勝福寺 得性寺
 善現寺 佛性寺 則善寺 得性寺
 長願寺 明榮寺 正信寺 光德寺
 勝蓮寺 大安寺 願生寺 正信寺
 善久寺 蓮通寺 願生寺 願生寺
 淨圓寺 本龍寺 長安寺 長安寺
 西心寺 正覺寺 善念寺 善念寺
 真友寺 明光寺 興行寺 興行寺
 光照寺 光榮寺 龍照寺 龍照寺
 改觀寺 積顏寺 常光寺 常光寺

得度式受式
 (一〇一六年一月一日～六月三十日)
 二〇一六年五月七日
 第十組 真成寺 海野 紵里
 第十二組 淨永寺 長井 香
 第十一組 净光寺 齊藤 美和子
 第十一組 佛念寺 神涼 崇昭
 第十一組 正樂寺 土肥 聖知
 第九組 善通寺 井上 誠一
 第十一組 稱念寺 土肥 秀文
 第十一組 圓常寺 柴田 惠秀

住職任命
 (一〇一六年一月一日～六月三十日)
 二〇一六年六月二十八日
 第九組 善通寺 井上 誠一
 第十一組 稱念寺 土肥 秀文
 第十一組 圓常寺 柴田 惠秀

教務所人事異動

富山教務所長 幽溪 浩
 富山教務所長に任命する
 富山別院輪番の兼務を命ずる

(一〇一六年六月二十八日付)
 長浜教務所長 龜渕 卓
 (一〇一六年六月二十九日付)

富山教務所長 幽溪 浩
 富山教務所長に任命する
 富山別院輪番の兼務を命ずる

